

大西 みつぐ  
門井 幸子  
白石 ちえこ  
森 利博

Mitsugu Onishi  
Sachiko Kadoi  
Chieko Shiraishi  
Toshihiro Mori

かつては、写真=モノクロであった。カラーフィルムの時代になって、カラーかモノクロかの2者択一になった。そして今はフィルターやモードで選ぶ事ができるようになった。カラーでもいいしモノクロでもいい。少なくとも撮る時点で決める必要もなくなった。画家が油絵にするか、水彩にするか、木炭にするか、版画にするかと同じようにボタン一つで選べるようになった。

色彩を自在に選びコントロールするというのは写真の理想であり希望であったはずである。その地点に立った今、モノクロの意味はそれまでとは異なっている。モノクロームを選ぶと言う事は、より意志的で明確な「ワケ」が必要になった。そしてその事は表現の根幹と直結している。

大西みつぐはカラーのスナップの傍らポラロイドやピンホールによる弛緩した時間の堆積と抽出を実践、門井幸子は文明の辺境において非日常空間への異化を図り、白石ちえこは古典的な銀塩プリントにより、時空表現の世界を深化させ、森利博は時間の流れを越えて風化するものの定着を図ろうとする。

それぞれのベクトルで意志的にモノクロの表現を続けている4人の試行を通じて、あえて今、モノクロームの可能性を確かめてみたい。

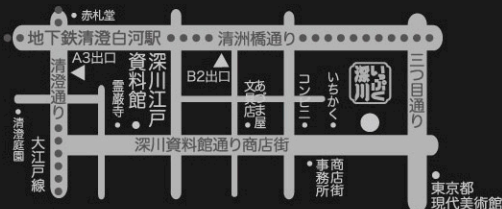
ArtLabo 深川いっぷくディレクター 白濱 雅也

Art Labo 深川いっぷく

江東区白河3-2-15 1F TEL 03-3641-3477

<http://www.fukagawa-ippuku.jp/>

E-Mail [fukagawaippuku@gmail.com](mailto:fukagawaippuku@gmail.com)



## MONOCHROME LANDSCAPE

色 の な い 景 色

2013年6月19日(水)~7月7日(日) 12:00-19:00



### 大西 みつぐ

1970年代から東京の下町を拠点として撮影活動が続けるほか、学校などで若い世代を指導、記事執筆など写真愛好家へのアドバイスも積極的に行なっている。近年は「すみだ写真博覧会」(2006)、「深川フォトセッション」(2010)など、イベントの企画実施も手がけてきた。個展、企画展多数。東京都写真美術館、国際交流基金、フランス国立図書館などに作品収蔵。著書に「WONDERLAND1980~1989」、「遠い夏」、「WONDERLAND」 「東京手帖」他 日本写真協会、日本写真家協会会員、ニッコールクラブ顧問、東京総合写真専門学校、武蔵野美術大学非常勤講師。酒田市土門孝文化賞選考委員。

「近所論・青い夏」と題した近所で撮るシリーズの数年前の作品だが、この時の身体を試みをまだ越えられないでいる。20分間微動だにせず、「そこ」にいることの確かさを不可解な画像に残したかったわけではないが、湾岸の大地との束の間の一体感は官能的だった。しかし、東日本大震災以後、東京臨海部の目に見えない激変があるせいか、身体を晒す勇気も日増しに失せてきた。「ブルネオアジア感光紙」という。もはややいた用途のない「印画紙」に私は一体なにを託せばよいのだろうか。



### 白石 ちえこ

神奈川県横浜須賀生まれ。1991年~アジアを巡る旅へ、1995年モノクロ写真暗室講座(船橋市主催)に参加。繰り返す旅の中で写真を撮りはじめ、日常に潜む小さな記憶をもとめて町を歩く。個展多数。企画展に「まちがミュージアム!」(富士吉田市/2005~09)、「足利風景一旅の視線、地の視線」(足利市立美術館/2010)、「会津・漆の芸術祭~東北へのエール」(喜多方市/2011)。清里フォトアートミュージアム、足利市立美術館に作品収蔵。写真集に「サポテンとつっぽ」(冬青社)、共著に「海に沈んだ町」(小説・三崎亜記/朝日新聞出版)がある。

旅先でいつも目の前に現れたのは、町の片隅で静かに深呼吸する、ちょっととぼけたモノたちだった。そんなモノたちに道案内をしてもらいながら歩く目的地のない散歩は、気持ちがほどこけていくようでわくわくした。そこでは生命あるものもないものも音も無く賑やかにうごめいていて、はじめて来たのにどこか懐かしく、知らないのに知っているような不思議な感情がやってくるのだった。2009年から手作り鶏卵紙の日光写真や銀塩プリントの古典技法で、風景や時間を閉じこめる試作をはじめた。

### 門井 幸子

東京都出身。多摩美術大学卒。2004年、PlaceMでの個展「創景」より、PlaceM、蒼穹舎ギャラリーなどで毎年個展を開催。2008年、マキイ・マサルファインアーツでのグループ展『Layered Landscape』に参加。写真集『KADAI SACHIKO, PHOTOGRAPHS 2003-2008』(蒼穹舎)を刊行。2009年、大西みつぐ企画「深川フォトセッション」に参加。その他、2011年、Photo Lab Gallery (オレゴン州USA)、北海道根室市明郷のGrassy Hillで展示。2011年~西東京市ひばりヶ丘公民館などで、写真や製本についてのワークショップを行う。



土や石、そびえ立つ木々を、人は自然と呼ぶけれど、実際それらのどこまでが自然物なのか人工物なのか、その境界はととてもぼんやりしている。せめぎあっているというよりはむしろ、共存しながら新しい世界をつくりだしているようにも見える。かなしいようでどこかユーモラスでもあり。人のいない景色のなかにその痕跡を感じるような場。そんな現代で現実の風景を撮り歩いています。

### 森利博

1968年、北海道根室市生まれ。1988年に東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)を卒業。その後1995年に帰郷し、北海道の産業遺産や廃墟をテーマとした撮影を始める。また書籍や雑誌、広告媒体などに写真を提供、道東発信で活動を続けている(2013年より、北海道標津郡中標津町に在住)。主な個展に『遠い記憶、忘れられた風景』北海道釧路市・NHK釧路放送局ロビーギャラリー(2008年)、『遠い記憶、忘れられた風景~II』北海道根室市・明郷伊藤☆牧場酪農喫茶 Grassy Hill (2010年)がある。



広い青空の下、樹木が生い茂る深い森や、どこまでも続く原野、うねる河川に緑輝える湿原。それらは永延たる自然豊かなイメージを決定づけている。誰もが求める姿、美しい北の大地、憧れの北海道。しかしそれらの中に時折、見え隠れする廃墟という人工物は開拓・開発の歴史、人間の生活の跡であり、この大地が本当の意味で北海道となるべく歩んで来た記憶である。そんな失われた北海道の時間にカメラを向けた。